



「できる」から「わかる」へ

私が担任だったとき、子供たちに「できる」と「わかる」には大きな違いがあることを言い続けてきました。人の学習時の思考には大きく4段階あります。「やってみようかな」動機付けの段階、「やってみよう」目標設定の段階、そして「できる」自己評価の段階とあります。



算数の問題で例えると解くことができたらこの「できる」という段階にあたります。子供たちには、多くの人がそこで止まってしまうと言いました。本来の学習の醍醐味は、もう1つ上の段階にあります。最上位のレベルは、「わかる」生活に生かす段階なのです。自分が学んだ知識を周りの友達に上手に伝えることができこそ学んだ知識が生きた段階だと考えています。この最上位に達すると、結局、人のためでなく、論理力を身に付けることができるなど、自分の学びの機会が増幅されます。また相手の理解度に合わせて、知識を伝えていくことで自分の知識を整理していくことにもなるのです。人とのかわり合いの学習を通して、「何のために学ぶのか」という意味や目的について考えるようになり、深い学びへとつながっていくと考えています。教室でこの段階に達していく子供たちを目にすると、ひときわ眩しく輝いて見えます。

来年度からの新学習指導要領の本格実施に向け、全国的に、そして本校においても現在準備をすすめています。本校では、新しいカリキュラムに沿った学校行事の見直しや授業数確保の生活時程の編成などに取り組んでいます。今回の改定では、学習評価についても再編成されます。そのなかでも、観点別学習状況評価の各観点において4観点から3観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）となります。既に文科省のホームページには詳しい情報が掲載され

ています。一度ご覧いただけたらと思います。学習評価の基本構造が変化しますが、人とのかわり合いを通して、知識の質を更に高め、何を身に付けさせたいのかということを確認するための編成なのです。未来を生きる子供たちにとって、激動する時代の中で様々な知識をどう組み立てて生かすのかという力の付き具合を振り返るものでもあるのです。



1学期は学年としてのベースを築きあげてきました。2学期は、そのベースをもとに、教科から行事まで多岐にわたる学習活動を通して、「できる」から「わかる」への思考の高まりを「知」の喜びとして感じ取ってほしいと願っています。さあ、明日はいよいよ運動会です。演技の練習においても、子供たちが友達とかかわり合いながら大きく成長してきました。学びのその過程で得た力を運動場という舞台で精いっぱい発揮してくれたらと願っています。子供たちに温かいご声援をよろしくお願い致します。教頭 小笠原 裕